

第 175 回「ラッセルを読む会」レジメ

日 時： 平成 22 年 7 月 17 日 (土) 15:00～18:00

テキスト： In Praise of Idleness, and Other Essays, 1935 (『怠惰への讃歌』)

第 8 章 西洋文明

★前半は 1928 年 10 月 18 日にフェビアン協会での講演内容であり、‘What is Western Civilization’ というタイトルで Scientia, v.46, n.7, 1929 年に発表されている。

□自分たちの文明を観察する 3 つの方法 (旅行、歴史(研究)、民族学)

1) 旅行

・旅行者は自分たちの興味を引くものだけを見る。

2) 歴史

・歴史家は、事件を自分の先入観からはじき出した型にならべる。

3) 民族学

・民族学者は、自分たちの時代に流行している偏見によって事実を選び、説明する。

<例：野蛮人に対する見方>

(ルソー主義者) 野蛮人は気高い心の持ち主

(帝国主義者) 野蛮人は残忍

(宗教心に厚い民俗学者) 野蛮人は行いの正しい家族もち

(離婚法改正主張者) 野蛮人は自由恋愛をしている。

(J. フレーザ卿) 彼らはいつも自らの神を殺害している。

→ 野蛮人は民俗学者が学説を創るのに必要なものは何でもしてくれる親切な連中である。

しかし、こういった欠点があっても、旅行、歴史、民族学は、自分たちの文明を観察するための最上の手段である。

□文明とは何か

1) 文明の第一の根本的特質は、(将来に対する)「予測」(ができること)である。

文明化された国家及び時代を、それらが行っている予測の量により区別できる。

○予測の程度(度合い)

3つの要素(現在の苦痛、未来の苦痛、その両者に挟まれた期間の長さ)

予測(の度合い) = (現在の苦痛 / 未来の快楽) × 両者間の時間

・個人の予測と集団的予測の違い

・集団的予測

鉄道、埠頭、造船などの関係者は利益が数年後になければ得られないことを予測している。

○知識

・「予測」以外に、「知識」も、文明にとって重要な要素である。

・迷信に基づいた予測は、完全に文明的なものともみなせない。

エジプトのミイラ: 数万年後に死者がよみがえることを想定し、死者に防腐剤を塗る。

2) 文明とは、知識と予測とを結合したものに基づく「生活態度」である。

□ 文明の始まり

上記の意味での文明の始まりは、農業と反芻動物を飼い慣らすことの始まりと同時期である。

・農耕民族(例: エジプト人)と牧畜民族(例: イスラエル人、蒙古人)との明確な区別

□ 西欧文明の特徴(科学と産業主義)

1) 産業革命以前の西洋文明

- ・ エジプトやバビロニア起源のものは、大体において全ての文明の特性を表すものであり、西欧独特のものではない。
- ・ 西欧独特のものは、ギリシア人に始まる。(演繹推理と純粋数学)
- ・ ローマ人は、文政とローマ法典によって、大帝国の統治を運営する方法を発明した。・・・
- ・ ローマ人は、支配者その人に対する忠誠に反対するような非人格的な国家に献身する徳を作り出した。→ ローマ人の「国家に対する献身の精神」は、西欧において安定した政治を生み出すのにはなくてはならない要素であった。
- ・ 政治と宗教との間に、キリスト教を通じて起こる特殊な関係 → 国家に捧げるよりも大きな忠誠心を捧げなければならない組織を発展させた。
- ・ ユダヤ人の道徳的熱情からは「キリスト教の倫理観念」が生まれ、ギリシア人の演繹的推理を愛する心から「神学」が生じ、ローマ人の帝国主義や法学を模範として、「教会の中央集権的統治」や「教会法典」ができた。

□ 中世時代の西欧文明

- ・ 文明は、自分より優れている異なった文明に触れない限り没落するのが、一般的原則。
- ・ 中世時代は、西洋が最上の文明ではなかった。

□ 近代以降の西洋文明

- ・ 進歩する偉大な時代は「卓越した能力を持つ少数の人々の努力」に基づいているという結論を出さざるをえない。即ちいろいろな社会的条件はその人達が能力を発揮するのに必要であるが十分ではない。(参考:市井三郎のいう「歴史におけるキーパーソンの演じる重要性」)
- ・ 「代議政治」: 中世時代のおかげをこうむっている重要なこと
代議政治のおかげではじめて、大帝国の統治を、統治されるものが自分で選んだものだと思うことができるようになった。
- ・ いろいろな手段(主として愛国心)による「政治的結合」は、西洋文明の著しい特徴である。
ユダヤ人の排他心、ローマ人の国家に対する忠誠、無敵艦隊に対するイギリスの反抗・・・
- ・ 西欧人はキリスト教の影響で個人をある程度尊敬することとなったが、この気持ちは科学とは無関係な感情であり、科学自体は私達に何も道徳的観念を与えてくれない。→新しい道徳的観念が必要。

□ 個人の自由を求める運動

- ・ ルネッサンスから15世紀の自由主義にいたる全期間の特徴をなすもの。
- ・ キリスト教は、愛他心、隣人愛を鼓舞するから、反個人主義的と考えられているが、これは心理学的な誤謬である。(キリスト教は個人の靈魂に訴え、個人の救済を強調している。)
- ・ 昔は、家族がこの個人主義を調整する働きをしていたが、今は衰えて行き、人々の本能に対して以前持っていた支配力をなくした。家族が失ったものを国民(国家)が獲得してしまった。・・・しかし、安定という立場からみると、国民(国家)では単位としては狭すぎる。

□ ヨーロッパとアジアとを区別するのは、他を迫害する衝動である。

- ・ 迫害の一つのもととなるもの、即ち民衆の嫉妬は、ギリシア人のなかで相当盛んなものであった。
- ・ キリスト教徒は、ユダヤ人の特別な啓示に対する信仰を守り続けるとともに、それにローマ人の世界支配欲とギリシア人の精緻な形而上学を愛好する心とを付け加えた。この3つが一緒に組み合わさったため、これまで世界に知られているものの中で最も他を迫害する宗教が生まれた。